

三 笠 文 庫

愛の無常について

龜井勝一郎著



三 笠 書 房

三 笠 文 庫

愛の無常について

龜井勝一郎著



三 笠 書 房

愛の無常について



昭和二十六年十一月三十日第一刷刊行
昭和二十八年二月十五日第四刷刊行

定價 六十圓

著者 龜井勝一郎 (かめい かついちろう)

刊行者 東京都千代田區神田神保町二丁目 竹内富子

印刷者 東京都練馬區南町一ノ三五三二 平尾秀吉

刊行所 株式會社 三笠書房
東京都千代田區神田神保町二丁目

電話 九段(33)六五〇四
七四八三
振替東京二二〇九六番

落丁や亂丁がありましたらお取替いたします

序

人間とは何であるか。汝自身とは何ものであるか。無數の人間が眼前に存在し、自分もまたたしかに實在してゐると思ひこんでゐながら、さて改めてこの問ひを徹してみると、我ながら異様な不安に襲はれるのであります。實在と思ひこんでゐるその根據が、いかに薄弱であり不安定であるか、「解放」さるゝにつれてこの危惧は増大するらしくみえるのです。自己とは、自己の内部でなく、外部に閉ぢこめられてゐる一種の「動搖」にすぎないのではあるまいか。或は一の幻影。激烈な世に生きつゝ、日々私はかうした疑念に襲はれてゐるのであります。

そこで私は、非力をもかへりみず、人間研究の書といつたものをかく氣になつたわけで、自己を素材としつゝ、人間存在の實態を出来るだけたしかめたいと思ひ立ちました。自己を素材にするとはいへ、この本は自叙傳ではありません。私といふ極めて微小な存在を客觀しながら、人間なる故に備へる様々な特質を摘出して、これに普遍性を與へようとしたのです。己を白紙に還し、すべての偏見、先入觀、イデオロギーといったものを捨て去つて、たつたいま生れたばかりのやうな眼で、人間をみられないものだらうか。これは私の修業であり、人間に對する驚異とともにまた絶望を豫想せしむるものであります。

私はこの本をかきつゝ、常に自分の背後に在つてかく促すものを自覺してゐたのですが、それ

は終章にわづかに語つたつもりです。(實は語りえぬものなのですが。) おそらく讀者はこゝに多くの矛盾を見出されるでありませう。この本はもとと矛盾の書と言つてもいいもので、それは人間がさうだからなのです。そして早急な解決、或は矛盾の統一といった理論的作業は一切拒否しました。理論としては辻褄が合つてゐようと、人間は元來辻褄のあはぬものなのですから。

私は結局どこへ、讀者を、また私自身を導いて行くつもりなのか。私は人を導く柄でなく、ただ自分が人間研究の裡に驅りたてられて行く、促され導かれて行く、その方向へ、何と言つたらいいか、行くだけです。即ち愛の無常と罪の意識へ。結果としては、私の宗教的方法叙説とでも名づけらるべきものですが、私は所謂宗教的に語ることが出来るだけ避けようしました。宗教を念頭におかずとも、虚心に人間を凝視すれば、どういふ結果が出てくるか、そしてどこへ行かざるをえないか、それを語りたいと思つたのです。世の所謂「救ひ」ではありませぬ。地獄に追放さるゝ自己の確認と言つた方が適切かもしれませぬ。それは苦惱であり、戦慄であるとともに、また快樂なのです。

この本をかくについて、私の念頭を去らなかつた一つの意圖があります。私は自宅で、或は地方を旅行して、様々の青年男女に逢ふのですが、その人達が切實に求めてゐるものに、少しでも答へたいといふ念願です。それは精神形成の基本コースとでも名づけたらいいもので、一人間が自己を、つまり精神を形成して行くためには、どんな行程を辿らねばならぬか。結局は人間研究に落着はしますが、私は能ふかぎりこれに秩序を與へてみようと思いました。第一章はとくにそのために力が注がれてゐます。

むろんこれは青年に必要なばかりでなく、私自身にもたしかめてみたかつたところであり、大人の裡なる青年性にも訴へて然るべきだと考へてゐる次第です。また本書の意圖したところに關しては、古來幾多の聖賢がかきつくしてゐることは事實で、私の改めて附加すべきものはないのですが、私はたゞ今の世に顯現して、思ひを改めたいと志したのです。すべては自分で味つてみるより他になく、それは同時に、死によつて確實に限定されてゐる人間の本音の自由を強ひる態のものでなければなりませんまい。

現代にあつて、いかなる政治的黨派、思想的立場をとらうと、各人の自由であります。或る立場を選んで、自己を自由なりと認めるには事缺きませぬ。しかし自由の最大の敵は、自分自身であることに氣づく人は少い。また眞の自由とは一の苦惱だと感じる人も少いやうであります。人生といふこの劇場で、人間といふ俳優の演ずる喜劇と悲劇を御覽に入れませう。

龜井勝一郎

目次

序

第一章 精神について……………一

一 人間生成……………二

a 考へることから死ぬことまで……………五

b 助産するもの……………三

二 危機と不安のなかに……………六

a 環境の考察……………六

b 自己の研究……………三

三 孤獨の革命的エネルギー……………七

a 悲劇的存在としての家族……………七

b 一粒の麥……………五

巧妙なる保身の罪……………二八

第一章 精神について

一 人間生成

我々は自分自身を、人間であると堅く信じてゐます。母の胎から生れたときから、まさしく人間の形をそなへ、長ずるにつれて若干の知識と経験を身につけ、人間として社會的に認めあつてをります。誰も疑ひませぬ。

ところで、これは確實な存在なのでせうか、それとも架空の契約にすぎないものでせうか。疑つてみませう。我々が自分自身を人間と思つてゐるのは、根づよい習慣の故ではなからうか。さういふ約束があるので、さう思ひこんでゐるだけのことではなからうか。ことによると、自分は人間でないかもしれないと。

一八〇八年のことです。世界史のもつ最高の人間、ゲエテとナポレオンが出會いました。ナポレオンはゲエテに向つて、「御身こそ一個の人間だ。」と言つたさうですが、これについてフランスの哲人ヴァレリイは次のやうに述べてゐます。

「御身は一個の人間だ。一個の人間とは……即ち萬物の一尺度といふこと、即ちこの存在に比しては、他の諸存在は人間の下繪、斷片にすぎぬ、殆んど人間共とは言へぬ、何となれば彼らは到底、我ら御身（ゲエテ）と余（ナポレオン）とのごとく、萬物の尺度とはならぬのだ——かゝる

一存在といふことです。」(「ゲエテ頌」)

假にかやうな人物が我々の前にあらはれて、「自分こそ人間だ、諸君は人間でない。」と宣言したならばどうであるか。反抗と嘲罵が起ること必定だと思ひます。「さういふおまへこそ架空の存在にすぎないではないか。」かく言ひ放つに相違ありません。天才とか偉人とかよばれる人間と、我ら凡庸な人間との現實的關係は、つねにかくのごときであります。しかし、それは我らの裡なる天才を待つ可能性と不可能性との關係と言つてもよい。一種の不安に襲はれるのです。自分自身を人間であると思ひこんでゐるのは、ことによると自分の抱いてゐる一番深い迷信ではあるまいかと。

世の中には、人間の顔をした人形が、いかに多いか、自己の内心に即してたづねてみませう。與へられた政治、その時々々の風潮、それに盲目的に従つて行くだけの人、黨派の中に在つて、自己個有の判斷力を失つてしまつてゐる人、すべてこれは人形です。のみならず近代的大企業の機構は、人間を機械化し人形化して行く強烈な作用をもつてゐます。我々は様々な職場に在つて、自分が單に一個の機械であり、働く人形にすぎないと痛感することは、實に多いであります。現代の政治も經濟も、文化すら——個々人の自由意志に立つことを原則とする文化すら、ジャーナリズムの龐大な機構によつて、己の意に反して人間をこの状態に強制してゐる。現代の悲劇です。我々はこの状態に慣らされて、自覺せずに住むやうになるのですが、ふと覺醒してみたと、自分が人間であるといふ確信は、根底から崩れるものではありませんまいか。

失はれた人間性の恢復。ルネッサンスによつて人間性を恢復した筈の、これが近代の悲鳴なのです。誰でもさう叫ぶ。さう叫びながら、その言葉の極端な普及性、言はゞ機械的な迅速さのう

ちに、一層人間性を失つて行くといった状態がみられるのです。自分、果して、一個の人間であるか。——この問ひを、様々な角度から發してごらん下さい。繼續的に、鋭敏に。この問ひこそ重大であるとともに、我々の苦悶の眞の源泉なのです。

「生れ變る」といふことを、私は人間の根本條件としてをります。人間は母の胎から生れたといふだけでは、未だ人間には成らない。普通に言ふこの誕生は、動物においてもさうなのであつて、何ら人間の特色とならないのであります。人間が人間に成るためには、一生のうちでも、幾度か生れ變らなければなりません。人間として「生れる」といふことは、「生れ變る」といふことです。そしてその最初の徴候が、即ち青春時代で、この時期に、はじめて「我」に自覺し、自發的に考へることを始めるのであります。パスカルの、次のやうな言葉を注目しませう。

「人間の生は、あはれにも短い。人はその生を、この世へ生れて來た最初の年からかぞへる。私ならその生を、理性が誕生して、さうして理性によつて人がゆり動かされはじめたときからしか數へたくない。さういふことは普通二十歳前には起らないものである。この時期以前には、大人は子供である。子供は人間ではない。」（愛の情念に關する説）

正確な觀察です。パスカルが「人間」をどのやうにみてゐたか、端的にうかゞはれるであります。自發的に考へること、彼の謂ふ「理性」が目ざめぬかぎり、人間でないのです。故に子供は人間でない。そして短い一生の間で、子供である期間が長いことを、彼は遺憾としたさうですが、これはまだいふ方で、一生の間、子供のまゝで過す未成人間が多いのではないでせうか。

世の所謂大人は、必ず自己の體驗に優越感をもつてゐます。しかし體驗とは何か。この世に順

應して行くかぎり、誰しも體驗はもつが、それは極めて狭い範圍の、受動的な蓄積物にすぎず、そのかぎりでは動物的なものにすぎませぬ。この體驗に思索を加へ、その意味をさぐり、形成し、變樣することによつて、はじめて人間的體驗といふものが成立するのであります。この力がなければ、大人とは單に傲慢な子供にすぎますまい。いや「恐るべき子供」と言つてもよく、現實の社會を構成する要素とは、大體においてこの「未成人間」かもしれませぬ。

「天下最も多きは人なり、最も少きも人なり。」(黒田孝高)

a 考へることから死ぬことまで

人間はいかにして生れ變ることが出来るか、換言すれば、人間が人間に成るための條件を考へてみたいと思ひます。私はまづ、青春といふ時期に即して、順序だてゝ述べますが、むろん論理的順序ではありません。『精神』とよばれるもの、「自己」とよばれるものが目ざめてくるときの一般的諸徴候に、或る秩序を與へんとするのです。

第一に考へるといふことについて。

これを冒頭においたのは、パスカルの見解に従つたわけで、「冥想錄」一四六に、「人間は明かに考へるために造られてゐる。それは彼の全品位であり、全價值である。故に、人間の全義務は正當に考へることである。ところで、思考の順序は自己から始め、それから自己の創造主と自己の目的とに向ふにある。」とあります。こゝで謂ふ「考へる」を、冷い理性といふ風に誤解しないやうに。「考へる」ことは、「愛する」とことと同義語なのであります。

ところで、何を考へるのか。言ふまでもなく、自己と人生と實社會。そこに向つて、まづ疑問

を發します。自己とは何か、戀愛とは何か、神とは、死とは、社會とは、その他無數の疑問が次々と生じる筈ですが、考へるとは、つまりかうした疑問を自己に課すといふことなのです。自己は、かゝる疑問によつて妊娠せしめられ、かくて自己を生む。むろん我々は様々の回答にかこまれてゐるわけで、まるで回答の中へ生れてきたといった具合で、習慣的に、當然のごとく思ひこんでゐるものも少くありませんまい。しかしその一切を、一切の權威をも、ひとたびは疑つてみることに。この場合、疑ふとは變革し破壊する力です。頭腦とは考へる手であつて、これを以て自然を變革して行く。生れるためには破壊しなければなりません。この意味での懷疑が考への行爲の中樞をなすのであり、精神の形成はここに開始さるゝわけです。

しかし、さきに擧げたやうな疑問はすべて難問です。どれ一つとつても、即刻解決出來さうなものはない、恐くが永遠の課題です。もし答へようとすれば、自分が生きてみて、自らを實驗臺とし、つひには死によつて證明する以外にない。回答が死でなければならぬやうな問題こそ問題なのであります。青春が、人の一生にとつて最も重大な時期と言はるゝ所以も、實にこゝにあるのです。つまり一人間として生涯を蔽ふに足る問題を、青春ははじめて自己の肩に擔ふといふこと、その問題は、同時に永續性、永遠性をもつといふ意味で重大なのであります。

パスカルが「人間は考へるために作られてゐる。」と言つたとき、間髪を入れず、おそらくこの永遠性を念頭においてゐたに相違ありません。人間といふ、あはれにも短い生命が、永遠といふ無限時間につき當るのは、たしかに「考へること」においてです。この意味で、「考へる」とは、すでに人間の限界を超える野望だと言つていいかもしれない。そしてこの限界、超克のすがたが、實は人間であることの最大特徴だとも言へますまいか。動物は、決して己を超えようとはしませ

ぬ。

ところが、このとき同時に人間の弱さがあらはれます。疑問の永遠性、永續性に耐へることはつらい。出来るだけ早く、簡単な解決をのぞむか、乃至は考へることを放棄する、いや別のことを考へるのです。パスカルはさきの言葉のつゞきとして、「舞踊すること、リユートを弾くこと、歌ふこと、輪遊びすること、戦争すること」等をあげてゐますが、かういふことに考へを向け換へて、人間の何であるかを考へようとはしなくなる。その條件はそろつてゐます。たとへば今日のスポーツは、精神にとつて危険な存在と化しました。私はスポーツを否定はしませんが、そのために新聞や雑誌の特別版が必要だといふことになる、これは知性のために危険だと言ひたいのです。一種の阿片的役割を果しかねない。

青春は元來性急なものであります。性急に結論を欲し、乃至は問題を切斷します。この性急さは、青春の美德ともなれば、惡徳ともなるものです。

どんな場合に、それは美德となるか、性急さが絶望に變るときであります。解きたい難問を擔つて、しかも容易に解決が得られぬとき、しかも考へることを放棄しなかつたとき、絶望します。性急と絶望は、青春の特徴ですが、同時にこれが精神の生成を示す注目すべき徴候なのであります。

絶望とは、何に絶望することであるか。言ふまでもなく自己自身に對してです。解決がたい問題の、解決しがたい所以が、骨身に徹してわかり、自己の非力と空しさが痛感されたとき、人は絶望します。それは懷疑と双生児なのです。ところで、この種の絶望こそ、精神が形成されつつあることの最大なる證明と言つてよく、人間の特質がこゝにこそあらはれるのです。動物は決

して絶望しませぬ。絶望した猿や馬などを想像しえませうか。子供も絶望しませぬ。人間に成りかゝつてゐる人間だけが絶望するわけです。つまり自己に絶望し、自己を否定しながら、第二の自己を形成して行く。絶望とは、「生れ變る」ための陣痛に他なりません。

尤も、世の中には絶望のポーズといふものがあります。「絶望」が流行さへしてゐますが、その實體をみると、無氣力の辯解にすぎないやうなのが多い。永遠性、永續性の放棄で、つまりほんたうには絶望してゐないのです。あの性急さは、こゝでは惡徳に變ります。絶望しない青春は、どこかにごま化しがあると思はねばならず、一般的に言つても、これは人間判斷の場合の一規準となるであります。大學の入學や入社試験のとき、私がもし試験官であつたなら、口頭試問で必ず次のやうに尋ねたい。

「あなたは絶望したことがあるか。いついかなるとき、あなたは絶望したか？」

絶望したことのない人間は、言ふまでもなく落第であります。

性急さが、惡徳となるもう一つの場合をみませう。それは、早く解決を得たと思ひこんで、そこに安心し、自己を限定するか、或は限定して貰ふ態度です。人間は誰しも安心がほしく、救ひをのぞむ。しかし手輕に得らるゝものでないことは、問題が大きければ大きいほど當然で、その大いさ深さを回避したとき、即ち早急に自己を限定したとき、人は獨善におちいるといふことです。

或る種の宗派性、黨派根性、官僚性、公式主義といったものは、すべて人間のこの弱さにむすびついてゐるもので、弱い精神、考へることの中絶、その空白に向つて他者からの限定が到來しやすい。そして人間は、この限定において一種の強さを示すものなのです。すべての全體主義、